

妹尾達彦著

『グローバル・ヒストリー』

桃木至朗

一次史料にもとづく細かい「実証」の職人芸に強くこだわる日本の歴史学界や教育界でも、(伝統的な職人芸の消失とともに?)ようやくグローバル・ヒストリーの認知度が上がり、翻訳書を含む出版物も増加している。唐代を中心に中国の都市・環境・歴史意識や女性史などの斬新な研究を行ってきた著者により、大学レベルのグローバル・ヒストリー教科書として編まれた本書は、「日本の近代国家建設が「西欧以外の唯一の成功例」と呼ばれた時代は、すでに遠く過ぎ去った」(一八〇頁)という問題意識をもち、日本特殊論やその背後にある西洋中心史観を打破する目的を明示した点で、評者が編纂に関わった『市民のための世界史』^①が「アジアを正當に位置づけ日本を完全に組み込んだ世界史」を掲げたのと共通の動機をもつと思われる。また、学部・大学院レベルの教科書・講座物では、従来の「日本型専門研究者」の生き方のままでもさして難しくない、特定の学説や理論の解説、個別のトピック・切り口を集めた論集などが珍しくないのに対し、著者がそれらと違った体系的な世界史叙述という狭き門に挑んだ点

に、強い共感を覚える。

ただし両書は対照的な内容・構成をもち、相互補完的な読み方が可能な書物である。すなわち教養課程の教科書として高校教科書の改善を強く意識しながら編まれた『市民』が、歴史学の方法や観点の解説を随所に掲載しつつ、全体は世界の構図を総合的かつ時代順に提示する一般的な枠組みに従ったのに対し、学部教科書である本書は、環境・交通・都市と国家、広域経済圏などのテーマを立て、高校教科書型の網羅主義を捨てて、方法とモデルを正面に掲げた歴史叙述を試み、従来にないかたちのまとまった世界史の知識・理解をめざしている。以下、『市民』との比較や、評者のグローバル・ヒストリーとの関わりの土台をなす東南アジア・海域アジア史、教養教育と歴史教育などの角度から、本書の特徴、あるべき読み方などについて論じてみたい。なお本書評で言及する評者や他の論者の著作の書誌情報は、本書の参考文献に挙がっていないものだけを注記する。

『市民』が歴史学の意義や方法を論じた「序章」「終章」の間に古代から現代に至る「三章を並べた(序章・終章を含め各章の始めに「読者への問い」、途中と終わりに「課題」「まとめの課題」を掲げる)のに対し、本書は大きな方針と世界認識の変遷を扱った「はじめに」と「おわりに」の間に一五講(それぞれ最後の後に「考えて調べてみよう」という考察課題を置く)を配列する。多くのグローバル・ヒストリーの論述(一六世紀以降を叙述する)と比べた構成・叙述の特徴として、東アジア(ユーラシア東部)の紀元前一〇〇〇年紀に成立する広域経済圏からモデルを抽出し、それにもとづいて前近代から近代までの五〇〇〇年のユー

ラシア大陸と世界の歴史を系統的に描こうとする（はじめに）という、独特の構成を押し出す。

一五講は三つの部分に分かれる。「第一部 グローバル・ヒストリーの理論と方法」（第1～5講）では、歴史叙述の方法、環境と都市・国家の形成などの一般理論的な叙述と、アフロ・ユーラシア大陸を東西に貫く農牧境界地帯（に成立する都市）を中心とする複数の広域経済圏（各経済圏内部の南北の結びつきも大事）およびそれらの共通する歴史の構造、それをとらえる空間的（東部・中央部・西部の三地域・時間的（四～七世紀、一六～一八世紀を画期とする三時代）区分などを叙述する。中国大陸の空間構成（「外中国」と「内中国」）およびその結果成立する大中国（「外」「内」両方を統合する）と小中国（「内」のみを統合する）の二類型といった、現代中国・東アジア理解に不可欠なトピックが解説される（第4講）一方で、アフリカの農牧境界地帯の歴史（第7講）が活写されるあたりは、著者ならではの腕前を感じさせる。

続く「第2部 グローバル・ヒストリーの三段階―古典国家・農牧複合国家・近代国民国家」（第6～14講）では、初期国家（前三〇〇〇年紀）、古典国家（前一〇〇〇年紀）、農牧複合国家（四～七世紀の混乱以降に形成。世界宗教圏の成立と並行し、都城時代、商業帝国の交替、古典文化の復興などの特徴ある現象を伴う）、近代国家（沿海都市網の拡大と並行し、国民国家を形成する）の国家類型に従って時代を分け、ユーラシア三地域を中心に歴史の構図を叙述する。うち、8～12講が農牧複合国家の段階の叙述に充てられる。「第3部 グローバル・ヒストリーとし

ての現在と未来」（第15講）では、ユーラシア大陸経済圏の形成（近代に内陸から沿海に中心が移動したものが再度内陸に移動）に向かう現代の趨勢を長期の歴史の中に位置づけ、そのような大陸の動きを理解しにくい特殊な歴史と世界認識をもつ、日本のあり方について問題を提起する。

日本で世界史やグローバル・ヒストリーを論じる際に必ず問題とされる日本の位置について本書は、焦点である遊牧世界との接触がないため「本講義の対象とするものではないが」、こうしたユーラシア大陸全体の歴史を参照することではじめて日本の歴史の普遍性と固有性を理解することができるため、随所で日本史の特色についてもふれると「はじめに」で予告しており、第一五講はそれに対応した結びになっているのである。

上記の章立てを、近現代中心の世界史Aと古代から通史を学ぶ世界史Bの中間を狙い、モンゴル帝国までに三章、一五世紀～一八世紀の近世に四章、近現代に六章を割り当てた『市民』と比べると、本書は遊牧民を主役とする杉山正明・森安孝夫らの世界史の側に近く、^④しかしモンゴル帝国を完成形とはしていないと見られる。日本の位置づけの差については後述する。

各時代・地域における世界史の認識・叙述の方法にも多くの紙幅を割く本書は、最初からA *World History for Citizens* という英語タイトルを掲げた『市民』に劣らず、読者に「そのまま理解するのでなく色々な角度から考える」ことを求めている。たとえば（1）異なる環境の境界地帯に都市と国家が成立し、それを中心として広域経済圏が出現する、（2）広域経済圏の歴史はアフロ・ユーラシアにおいて一貫して、中緯度帯を東西に延びる農業

と遊牧が接する地帯（農牧境界地帯）を主舞台として展開したが、近代にはそれが沿岸都市を中心とするものに変化した、（3）農牧境界地帯に第2部の時期に成立した世界宗教などの普遍理念が沿岸都市を基盤とする近代文明の前提となった、などの著者の主張（第2講では「仮説」として提起される）は、（1）農業地域の内部発展によって都市・国家や文明は成立した、（2）古代・中世の世界史の中心はヨーロッパ・中東や中国などの大農業地域にあった、（3）人権思想など近代文明は前近代との断絶を示す、といった通俗的な歴史像をひっくり返すものだが、それらの論点や全体を貫く普遍性・共通性の強調のすべてが「文脈を超えた正しさ」を主張しているだろうか。その点で本書は、日本では学生はおろか研究者もしばしば苦手とする、学問一般の方法やタイプ分けについての幅広い教養を土台とした「文脈／パラダイムの読み取り（メタレベルの理解）」をせずに「唯一の排他的に正しい歴史」として読んでしまうことがないよう、読者に多くの注意を要求する。大きいもの・強いものが好きで、進んだ遅れたなどの格付けを歴史を学ぶ目的とするような男性読者（中心性を主張しない東南アジアなどの地域や、強い弱い議論を拒否するジェンダー史などの領域は無視して平気であることが多い）は特に、本書が示す西洋中心史観や中国中心史観の打破、さらには梅棹忠夫の文明の生態史観が遊牧民に与えた負の役割（その圧力が中国やロシアなど専制国家・共産主義を生んだ、それを受けなかった西欧と日本で封建制／資本主義という発展がおこった）の逆転などを、「従来説の単純な裏返し」の中央ユーラシア中心史観——それはある覇権的な「〇〇中心史観」に別の「〇〇中心史観」を対

置することに安住する点で、学知の覇権性に無批判な「中心中心史観」に陥りがちである——にしてしまわないよう、大きな努力を払わねばならない。

文脈に注意すべき例をあげよう。本書第5・6講は人類社会における都市の成立と国家の形成をほとんど等置しているが、インダス文明（地域的に本書の枠外？）のような国家なき都市文明はどう理解したらよいだろう。また人類史上には、都市より農村が発展を先導した国家が存在しないか。次に、超越的価値の前に個々人が平等な世界宗教が、個人の権利に基盤を置く近代社会の誕生を可能にした（第7講ほか）とすると、そういうものをもたなかったヒンドゥー教徒には、近代化は不可能だとならないだろうか。「世界宗教圏に包含されなかった地域では、近代社会の訪れが遅れたというような事実は、あるのだろうか？」という第9講の「考えて調べてみよう」は、読者の「近代」についての歴史認識を厳しく問う課題だろう。また第2部は紀元前後の「古典国家」を巨大な共同体、その後に見れる農牧複合国家は共同体を超えた普遍性に立脚する国家と見なし、後者の時代に成立した世界宗教圏（キリスト教、イスラーム、仏教を代表とする）の普遍性・超越性が近代文明を準備したとする。国家や普遍思想に関するこの「個別から普遍への単線の発展段階論」は、「古代地中海世界／中世ヨーロッパ封建社会だけが近代を生み出した」という支配的歴史観と二者択一の関係にあるだろうか。

本書は、近代世界そのものについてはわずかに1講を充てるだけである（第14講）。近代世界に関するグローバル・ヒストリーの文献はいくらでもあるので本書で述べる必要はないという考えは

成り立つにしても、「なぜ」近代世界は形成されたか、近代化とモダニティ（近代性）とは何だったか、近代国家イコール国民国家だろうか、といった問題群を意識しながら本書を読むことは、やはり必要であろう。それらについて従来の理解を刷新すべく世界中で二〇世紀末から起こった数量経済史や自然科学的方法も活用する「近世（初期近代）の見直し」、ネーションと主権国家・国民国家や帝国という国家像の再検討といった問題に関する読者の理解は、十分新しいだろうか。個別例では、九一四世紀における古典復興が西洋のルネサンスに限られる現象ではなかったことを述べる第12講を読む際に、読者は現在のヨーロッパ史に（高校の世界史教科書を含めて）ルネサンスを近代の序曲でなくむしろ中世の延長上でとらえる傾向が出現していることを意識できるだろうか。

これら近世・近代の理解を確認する際には、本書がユーラシア東部の歴史的経験を全体のモデルとしたことの意味を含めて熟考が必要である。たとえばその空間において二〇世紀末に起こった「東アジアの奇跡」およびそこで顕在化した日中の発展経路の分岐の背景として、沿海部都市の発展（＝アジア間交易の発展）だけでなく、『市民』が力を入れて解説した「近世における小農社会の形成とその朱子学化」についてホットな議論が繰り広げられていることは、読者の間でどこまで理解されているだろうか。近世の小氷期と近代以降の温暖化など環境の激変（農牧複合国家の時代の始まりについて気候変動の影響を述べるが、その時代の終わりとその後の変動についてはふれない）はどうか。第三部で現代・近未来の展望として示される大陸経済圏の形成は、上で述べ

た「沿海部中心の東アジア近代」が、「東アジアの奇跡」で絶頂を迎えたのち速やかに「少子高齢化による人口減少社会」に突入し行き詰まりをあらわにしている状況^⑤に対しても、救いの神となるだろうか。それとも「家父長制」原理を変えない限り、大陸経済圏も同じ道をたどるのだろうか。

地域や環境については、東アジアに限らず、読者が考えるべき点がいくつかある。砂漠・草原を除いた地域にとつての森（農牧境界地域の北の森には言及するが、南の森はどうだろうか）、ユーラシア西部にとつての地中海など海の役割はどう考えられるだろうか。

評者の観点では、日本列島や東南アジアの島々など遊牧地域が存在せず、大陸で普遍的な農業地域と遊牧地域の衝突と交流、融合の歴史を経験しない地域は歴史のどこが異なりどこが共通するかを問うた第3講の「考えて調べてみよう」は、特に重要である。これに答えようとする読者は、評者がこれまで再三紹介してきたアメリカの東南アジア史家リーバーマンのStrange Parallels^⑥の議論を参照するとよい。東南アジア大陸部の歴史を基準として八〇〇一八三〇年のユーラシア各地域の政治・文化統合を比較したリーバーマンは、ユーラシア全体を遊牧民の圧力に恒常的にさらされた中国・インドや中東などのExposed zoneと、モンゴル時代以外はほとんどそれがなかった東南アジア・日本・ヨーロッパなどのProtected zoneに分け（この梅棹と同じ）、前者の地域で少数派の支配者のもとで効率的な行政・軍事制度に支えられた多文化の広域帝国が成立するのに対し（その評価は杉山・森安両氏や妹尾氏に近い）、後者の地域では中規模の近代国民国家の

原型になる統合が成立する（ただし元来そのコースを歩んでいたロシアはモンゴル帝国解体後に——モンゴルの遺産を含む諸要素によって——巨大帝国の道を歩む。また東南アジア島嶼部は近世にヨーロッパ人に対する Exposed zone となつて統合のあり方が変化する）という像を描き、英語圏の学界で広く読まれている。

ユーラシアを二つに分けるこの構図は、冷戦時代の梅棹のような西欧・日本賛美とは一線を画し、また Protected zone がユーラシアの辺境であり、その文明と国家の形成は Exposed zone よりずっと遅れて、後者の文明の摂取を通じて実現する（ただし、ユーラシア全体を襲つた一四世紀の危機による統合解体の後は、一六世紀・一八世紀と周期的に起こる解体ないし混乱と、それぞれの危機——後の危機ほど混乱期は短くなる——の後に来るさらに強固な統合という「循環的かつ線的な」統合強化のリズムが、両地域ではほぼ同期する）ことを認めている。が、だからといって近代を異常で例外的な時代として無視し、日本を世界の普遍性を理解できない特殊な存在と決めつけるようなことはせず、遊牧民の影響を受けないがゆえに Exposed zone の広域帝国にない、密度が濃く均質な統合に向かったことなど、小さく普遍的でないことの強みにもあらためて光を当てる。

リーバーマンは八〇〇年から一四世紀の危機までの時期に Protected zone で成立し、それぞれ後世に「わが国のかたちが定まった」と見なされた国家群を「憲章国家」と呼ぶ。その特性としてあげられる「小さいが緊密」「後世につながる国家の出生」などは言うまでもなく、ヨーロッパ史において「暗黒の中世」に積極的な意味を見出そうとする努力に由来する論法である。それ

が西欧（や日本）を特権化する「新手の近代化論」ではないというリーバーマンの言明が「言い訳」でないことを保証しているのは、ヨーロッパや日本の歴史のリズムとトレンドが東南アジア大陸部と並行している——東南アジアがヨーロッパや日本と並行しているのではない——という彼の枠組みの独自性である。さらに付言すれば、かれはそこで東南アジア大陸部が世界史を代表しているとはまったく考えず、なぜこういう不思議な同時性が見られるのか、国際交易と農業、軍事などの技術拡散、気候変動や伝染病など幅広い候補に当たりながら、探究を続けようという姿勢を崩さない。

以上のように、本書は「旧来の史観に代わる正しい歴史」としてではない多面的・多角的な読み方を要求されるうえ、著者独自の概念や用語も多用されるため、対面授業でなく本書だけを読んでも理解するのは簡単ではなく、複数の博士後期課程院生やポスドク研究者が加わる読書会などで読むのが、学部生や博士前期課程院生には最適かもしれない。また、個人の著作として当然ながら細かい記述には正確でない点があるから、そこにはユーラシア東部や日本、ヨーロッパなどさまざまな地域の専門家が加わり、点検しながら読み進めるのが望ましい。たとえば東南アジアについて言えば、都城・歴史書など固有名詞を挙げるベトナムを含め、記述は不十分または不正確であり、専門家による補足・訂正を要する（都市と環境・交通を切り口とする本書で最大の問題点は、東南アジアの港湾都市を海岸港とする14講の記述。アユタヤ、ヤンゴンやサイゴン、プノンペン、ハノイ「昇龍」タンロン」など大陸部の主要港市と、シュリーヴィジャヤのパレンバンなどスマ

トラ東岸の主要港市は河川港である)。東南アジア史について、現在では日本語で読める高水準の事典や解説書もあり、他分野の研究者や学生も自分で調べるべきなのだが、入り口ではやはり専門家のアシストが必要だろう。そのような条件をもつ場で読まれるとき、本書は地理・環境や空間への深い造詣、異質なものの接触による創造という観点など多くの点で、世界史を多面的・多角的にとらえようとする読者に前向きな刺激を強く与えるだろう。本書の八四の図表、巻末の一〇〇点を優に超える参考文献、それに二二の重要用語の解説など、著者が注いだ情熱と労力が、そこでこそ光を放つに違いない。

① 大阪大学歴史教育研究会編、大阪大学出版会刊、二〇一四年。

② それらが大手受験教科書を丸暗記した読者を前提とし、それをゆさぶる視角や事実を提示することをもって我が事成れりとしてきた点を、評者は強く批判してきた。新しい考え方と世界史像の両方を体系的に示さない限り、ヨーロッパ中心史観・中国中心史観も国民国家史観も変えられない。

③ 本書評や『市民』の背景にある評者の世界史叙述の内容・枠組み・意義に関する考え方は、『海域アジア史研究入門』（桃木・山内・藤田・蓮田編）の総説、『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史』、『総論 われわれが目指す世界史』（編集委員会〈秋田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗〉、『世界史叢書総論』『世界史』の世界史）『ミネルヴァ書房、二〇一六年、三九一—四二七頁、『周辺国』の世界像―日本・朝鮮・ベトナム―（三谷博・李成市・桃木至朗共著、『世界史叢書総論』『世界史』の世界史）七八—一〇六頁などに示されている。あわせて参照いただければ幸いである。

④ 本書と同様に中国史研究者が宮崎市定や梅棹忠夫の枠組みを手引きとしながら、農牧境界（接壤）地域を軸とする世界史の構図を論じた一般書（よりビジネスマン向けだろう）に、『世界史序説―アジア史から一望する』（ちくま新書、二〇一八年）など岡本隆司の著作がある。

⑤ 現代日本の高校・大学教育では、異質な学問同士の相互理解や協働の方法を含めてあらゆる学問研究に共通の土台造りのための教養教育——古典的には論理学、科学哲学や科学社会学など、文系では哲学、理系では数学が担当してきたもの——がひどく古い（不足している）点に、評者は強い危機感を抱いている。歴史無用論とこれに反対する護教論の両方のお粗末さ、入試改革や教員養成、専門教育をめぐる議論の保守性などことを取っても、この種の教養の不足が響いている。現実に教養教育と称しておこなわれているアカデミック・ライティングや情報収集・処理の基礎、個別学問の概論の切り売りなどは、大学入学資格が得られる「国際バカロレア・ディプロマプログラム」の必修科目「知の理論」（紹介はたとえば Sue Bastian, Julian Kitching, Ric Singh 著、大山・後藤訳「セオリー・オブ・ナレッジ 世界が認めた「知の理論」」ピアソン・ジャパン（株）、二〇一六年）のごときものと組み合わせなくてはじめて、十分な効果を発揮するだろう。

⑥ 都市を「村落よりも大きな人間の集住地のこと、農牧業等の第一次産業に携わらない人々が集住する場所」（用語解説）と定義するのは、ギリシア・ローマの例を引くまでもなく安易にすぎないか。

⑦ 宮嶋博史「東アジア小農社会の形成」溝口雄三ほか編『アジアから考える6 長期社会変動』東京大学出版会、一九九四年、六七—九六頁、杉原薫「東アジアにおける勤勉革命経路の成立」『大阪大学経済学』五四（三）、二〇〇四年、三三六—三六一頁、中村哲「東アジア資本主義形成史論」汲古書院、二〇一九年など。なお大清帝国史の杉

山清彦（『中央ユーラシア世界：方法から地域へ』羽田正編『地域史と世界史』ミネルヴァ書房（世界史叢書2）、二〇一六年、九七一―二五頁）が、中央ユーラシア史の枠組みを重視しつつ、近世・近代のユーラシア東方における遊牧世界の周縁化を論じているのも、読者が本書と対比して考えるべき論点であろう。

⑧ 小農社会を基盤とする「勤勉革命」など急速な近代化・資本主義化（『東アジアの奇跡』こそが、西洋的な「近代家族モデル」との結合も含め、世界史上に例のない東アジアの急速な少子高齢化（や過労死社会）の歴史的前提を創り出したと、評者は考える。東アジア少子高齢化の歴史的背景を問うた「市民」第13章の「まとめの課題」、その問いを拡大し説明を加えた拙稿「現代東アジア諸国の少子化を歴史的に理解する」（秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで』大阪大学出版会、近刊、所収）など参照。

⑨ Lieberman, Victor. 2009. *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800–1830, volume 2: Mainland mirrors: Europe, Japan, China, South Asia, and the Islands*. Cambridge: Cambridge University Press.

⑩ リーバーマンは初期のモスクワがモンゴルの行政・軍事制度などを摂取して成功した事実を認めつつ、遊牧系の少数支配者を載かない「ロシア人の国家」としての発展を重視して、Protected zoneに含めている。

⑪ たとえば平凡社の『新版東南アジアを知る事典』（二〇〇八年）を使わない研究者は、東南アジアを知る必要はないと考えているものと見なされると思っていたきたい。ただし岩波・中央公論・講談社・山川出版社等の講座・シリーズ物の東南アジアを扱う巻にも質のばらつきはあるし、日本語のインターネット記事には問題が多い。これら

は中国史・中央ユーラシア史に比べてはるかに少ない東南アジア史の大学研究者のポストや大学の授業開講数と、東南アジア史学界の外部発信戦略の拙さの両面から検討すべき問題だが、当面は専門外の研究者が東南アジア史を理解しようと思えば、信頼出来る専門家を見つけるのが賢明だろう。

（B5判 二八六頁 二〇一八年四月）

中央大学出版部 税別三〇〇〇円
（大阪大学文学研究科教授）